

---

# 小説家になろう

モリヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小説家になろう

### 【Nコード】

N5757M

### 【作者名】

モリヤ

### 【あらすじ】

小説を書こうと思った俺の実体験レポートのようなもの

## **（前書き）**

まず最初にごめんなさい

タイトルとか……いろんな意味でごめんなさい

なんか、問題あったら報告して下さい申し訳ない

物心ついた頃から　書くことが好きだった。

中学時代通っていた英語塾に、何故かタイピングゲームがインストールされた2台のパソコンが用意されていて、ままさんと2人してランキングを競いあっていた。

おかげでブラインドタッチだけは随分と上達し、ある日父親が俺専用のパソコンを買ってくれたから、道具はもう揃っていた。

小説家になろう

いつからか、そんな夢を抱くようになった。

「なんかいいネタ思いついたか？」ままさんが言う。

ままさんは、幼稚園の頃からの幼馴染で、大親友だ。

アニメとゲームをこよなく愛する　いわゆる『オタク系』なままさんは、リアルの女性に興味がないふうだった。

「俺は2次元の世界で生きたい」ままさんの口癖だった。

(……いや、それは無理だろ)

一見、現実逃避しているようにも見えるが、実は非常に物事を論

理的に考えるリアリストでもあり、俺よりもずっと頭が良かった。

「だいたいよ、小説家なんてそんな簡単になれるもんなのか？  
その前に、何か1つの事をずっと続けてきた事がお前にはあるのか  
あ？」

「……いや、まあ確かにね、仕事……ぐらいか」

俺は生まれてこの方、何か1つの物事をしつかりキチンとやり遂  
げた！ という経験がない。

ビジュアルバンドに憧れてギターを習い始めたが、アルペジオの  
練習中に小指が痛いという理由で挫折した。

テレビアニメとしても放映されていたスラムダンクに憧れ、バス  
ケ部に入部をするも、汗をかくのが嫌だからという理由だけで、部  
活を怠けるようになった。

喧嘩の強い男になりたいと意気込んで空手部に入部すれば、先輩  
と組み手の最中に腹を殴られ、あまりの痛さに泣きべそをかいて退  
部した。

「英語を喋れる男は女の子にモテる」と、誰かが言っていたのを  
真に受けて英語塾に通っていたが、すぐに飽きてままさんとタイピ  
ングゲームばかりしていた。

大学のサークルというものに憧れて、大学へ行こうと決意するも  
の、勉強が嫌いだという理由で入学を諦めた。

社会人になってからも、スーパーの店員、コンビニの店員、整肉

工場、警備員……いろいろやっては見たものの、どこの職場でも何故か上司と喧嘩になって、怒鳴り散らしてクビになる。

そんなこんなで気がついたら、特に何も出来ないまままで30年近くも生きてしまった。

「……どーしょ」 いったいどうしたらいいと言っのか……。

「知るかよ！ ってかタクシーが続いたのが奇跡だよな」 ままさんが言う。

3年前、仕事が楽そうだからという理由でタクシー会社に入社した。

2種免許の取得費用など多少の問題はあったが、実際に働き始めたこの業界はやはり楽で（と言ったら失礼だが……）、おかげさまでもう3年も続けている。

「でもタクシーってもうかんのか？」 「いや、全然もうからん」

俺は今、タクシードライバーとして働いている。

確かに、この仕事は楽な面が多い 仕事中は基本、営業車を運転し1人でいる事が多いため、上司や同僚から監視される事もなく、人の目を気にする必要もないし、労働時間帯も大まかな決まりがあるだけだから、比較的好きな時間から仕事を始めて、帰りたい時間に家に帰る事も出来る。

休憩だって、仕事中眠くなれば適当な場所に営業車を停めて1、2時間昼寝をしたって、会社から怒られる事がない。

家に戻って休みたいなら、いつだって戻る事も出来るし、サボろうと思えばいくらでサボれる。

ただ、そんな自由度の高さと引き換えに、この業界の市況は非常に悪い。

数年前　とある総理大臣が規制緩和きせいかんわなんてもんを提案してくれたおかげで、市内はどこへ行ってもタクシーだらけ……客の奪い合いが日常茶飯事となっている。

「おいこら、今割り込んだろが!」「……は? なんすか?」

いつものように営業車を運転中、別の会社のドライバーがイチヤモンをつけてくる……なんて事もたまにある。

俺はただ流し営業をしている最中に、乗り場付近で手を挙げているお客がいたからその場に停まったただけなのに、客待ちをしていたドライバーに文句を言われてしまった。

「え? ここ駄目なの?……仕方ないなあ」

俺の車に乗った客が、申し訳なさそうに俺の車を降り、イチヤモンをつけてきたドライバーの車に乗ろうとする。

「いや、いいっすよ、……このまま出しますから」

俺は客にそう言い静止させると、運転席のドアから文句を放つドライバーの顔を無視して、営業車を発進させた。

「だいじょぶー？ ……あの人怒ってたよお？」 ……ああ、たまにいますから」

ちょっとした事で喧嘩になり客を奪い合ったりするのも、ドライバーの多さに反比例するように客が少ないのだから、仕方ない。

だが、いちいち相手もしてられない　こうしている間にも、時は刻一刻と経過してゆくからだ。

限られた時間の中で、とにかくいかに効率よく客を拾うかを重視して、流す。夜になれば適当な場所で客待ちをして、客を拾う。

それをできるだけ多く繰り返さなければ、とてもこの業界では生きていけない。

それは、業界人なら誰もが知っている事だから……。

「今日どう？　稼げてる？」　「いやー、全然」

仕事を終え会社へ戻ると、早々に同僚に声をかけられた。

「金曜日なのに全然人いなかったねー、いやーまいった」「ホントっすね」

こうやって職場の同僚や、ドライバー達と会話をすることはよくあるが、誰と話していても、「客拾えねえ」だの「人いねえ」だの、「散々待って乗った客、１メートルだったし」だの、業界の不況話ばかりが話題に上がる。

（……はあ、転職すっかなあー）



このままタクシー業界で食っていかうと思っても、景気は一向に回復の色は見せず、市況は悪くなる一方だ。

この業界は、別の会社で定年を向かえ余生の小遣い稼ぎで働く年金暮らしの老人や、年齢の関係上どこへ行っても雇ってもらえないような年配者がほとんどだ。

俺のように、まだ30にもなっていないうちから業界に入る人間はごく稀で、実際社内でも俺は1番若かった。

「あんちゃんまだ若いんだから、今のうちにもっとマシな職場探したほうがいいんじゃないのー？」

個タク（個人タクシー）のドライバーに、そんな事をほのめかされた事もある。

（……マジで転職すっかなあ）

とは言っても、生まれてこの方をやっても長続きしなかった俺にとつては、珍しく3年も続いたタクシー業界から退くと言う事は抵抗もあった。

前日の朝から働き始め、既に日付が変わって4時間も経過した頃、やっとの思いで帰路に着く。

家に帰ればもうクタクタで、何かをする気力もないまま横になる  
そんな毎日。

〃  
〃

突然、携帯の着信音が室内に鳴り響く　　肉さんからメールが届いている。

『今夜、あの喫茶店で集まりませんか？』

「了解っす」とメールを返した。

数時間後　長い長い眠りから目覚めた俺は、となり町にある喫茶店へマツダのデミオを走らせる。

ブーン！ブウウウー！ー！　と軽快な音をたて、デミオが快調に走り出す　最高だ。

つい最近、貧乏にも関わらず長年乗り続けた愛車から、乗り換えただけの新车であるデミオ。

マツダはいい、なんといってもこの加速　風になった気分だ。

夜道をひた走り、喫茶店へと到着すると、既に全員集まっている。

俺は意気揚々とデミオを乗り捨て、店内へとホップステップジャンピング！　オンザTVニニューヨーク！！

……ごめん、ふざけすぎた。

……なんだこれ、すげえさみいな。

……まあ、仲間と集まるのは好きだ、いいストレス発散になる。

「おっす！」「お疲れ様です」

いち早くままさんが、続いてエロシが俺に声をかける。

「えーと、……どこに座ればいいのかな？」「あ、ココいいですよ」

俺よりも10歳近く年上の肉さんが、丁寧に敬語を使いながら真ん中の席をよけ、そこに俺を座らせる。

エロシは、ままさんと同じく幼稚園からの幼馴染で、1学年下の後輩だ。

普段は外壁工事の仕事をしており、適度に肉の盛り上がったいわゆる細マッチョ野郎だ。

アクティブそうな外見とは裏腹にとんでもない人見知りで、初めて会った人間とは1対1では会話をする事すら出来ないが、1度仲が良くなった女の子とはセフレ状態に陥ることもしばしばあるような、ムツツリ野郎でもある。

「……でさ、もやしの栄養素って結構奥深いよな」「ああ、金ないとき重宝するんすよねー」

俺がやってきたにも関わらず、それも気にせず会話に戻るままさんとエロシ。

この2人はいつでもマイペースだ。

他のメンバーの事も気にせず2人の世界に入るラブラブぶりといったらもつ……ホモかと！ お前らデキてるのかと聞いてみたくなる。

(……てか、もやしの話って)

もやしをテーマにここまで語り合える人間は、世界でもこの2人だけだろう。

2人のラブラブぶりに呆気を取られながら視線を移すと、「!!」正面に座る天皇陛下みたいな顔の男と目があつた。

「クツ!!」天皇陛下みたいな男に睨み返す俺。

「!!」「!!」陛下も同じように俺の目をじっと見つめ、不可解なにらめっことが続く。

無言のまま、表情を変化させていく俺。

なんとしても、このにらめっことに勝利しなくてはと、必死に形相を変え続ける。

ちよつと目を細めてみたり、口を尖らせて『ひょつとこ』の真似を試みたり……ハタからみたら、相当異様な光景だろう。

(……へ、変態だ)自分でそう思いながらも、陛下から目を背ける事など、俺には出来ない。

「……ブツ! くははははっ!」数十秒して、とうとう陛下が限界を迎え笑い出す。

「いい顔が出来るようになったね」

よく分からないが、陛下に褒められた俺は感激のあまり立ち上がり、陛下の頭上に右手を差し出す。

「ありがとう！」

何故か大声で感激をあらわにし、陛下と握手……ではなく、陛下の頭を鷲づかみする。

「いやいや、ホントにありがとう！」いったい何をやっているのか。

この天皇陛下みたいな男は、仲間内ではマーボと呼ばれているおそらく、仲間内では1番の変態だ。

変態を極限まで極めたようなド変態といったら、こいつの事だと、変態同盟の会長がメダルを渡しにやってくるほどだ。

その、変態イズザオブイズマーボは、確かに変態ではあるが、この俺の命の恩人でもある。

天皇フェイスに変態な上、面倒くさがりで気の小さい性格でありながら、非常に仕事熱心でもあり、人一倍人情味のある変態なのだ。

3年前、俺がまだこの街に慣れていなかった頃、俺を自身のアパートに居候させ、仕事を怠けてばかりの俺のために給料の1部を恵んでくれたり、食事を奢ってくれたり、時には職場まで送迎してくれたり、至れり尽くせりの働きぶりを見せてくれた 偉大なる変態だ。

とにかく、こうやって時々仲間内で集まってはワイワイ騒いで語

り合う　そんなひと時が非常に楽しい。

「小説のほう、進んですか？」肉さんが、いきなり話を振ってくる。

「まあ、……まあまあ」曖昧な返事　進んですよーなんて、言えるワケがない。

「お前、ホントに小説家なろうと思ってんのか？」「いや、それはマジですよー」

ままさんに突っ込まれ、とりあえず言い返してみる。

小説家になりたいという夢は、嘘じゃない。

ただ、小説を書くとは思うものの、何も書けない。

「実際さー、今の職場ってさー、全然稼げないし……だからって転職したって、今までの経験から言ってどうせすぐ辞めちやいそうだしさあ……」

「まあ、……タクシーはなあ、……でもだからって簡単に小説家！　なんて無理だろうが！」

「いや、わかってんだぜそれは……」

でも、書くぐらいしか思いつかない　というよりも、書きたいんだと思う。

昔から、書くことだけは好きだった。

勉強が大嫌いだった俺は、学校の授業もロクに聞かずいつも昼寝ばかりしていたが、脳内では当たり前のように色んな妄想が浮かんでいた。

色んな物語を、頭の中で繰り広げていた　　はずだった。

にもかかわらず、実際書こうとすると、何を書いていいのか分からないのも事実だった。

勉強は嫌いだったのに、小学校の道德の授業だけは、熱心に取り組んでいた。

200文字詰めの手稿用紙に、授業や読書の感想文を書いたりとか、そういう事が好きだった。

でも、小説だと書けない。

「なーんで書けねえんだろうなあ」さっぱりさっぱりだ。

「そもそも、小説読んだりしてるんすか？」後輩のエロシにまで突っ込まれる始末。

考えてみれば、書く以前に読んだ事すらない。

語り合っただけで家に帰り、パソコンのモニター前に腰掛ける。

「よっしゃ！」とにかくまずは小説とやらを読んでみよう、ウエブブラウザを起動する。

「し・よ・う・せ・つ……つと」『小説』と漢字に変換してキーボードのエンターキーを押すと、グーグルの検索結果の1番上に、『小説家になるう』というサイト名が表示された。

よしよしとクリックし、サイトを閲覧する。

適当な小説に目をつけて、とりあえず開いて読み始めてみるが……。

「……フムフム、……なるほど、……うん、飽きた」10分で飽きてしまった。

だいたい、絵も映像も音声も付いていない　ただの活字だけの文章を延々読む作業というのは、俺にとっては苦痛だった。

こんな言い方をしたら失礼かもしれないが、小説家志望にも関わらず、文字を読むのは苦手なのだ。

本末転倒とはこの事か？

本当に俺は小説家になれるのだろうか？

「うー……ん、……ぬー……ん」

いーいっくら考えても、小説のシの字も出てこない。

「あれえ？　どうやって書いたらいいんだろっ？」



簡単なブログとかエピログとか、設定的なものなら、いくらでも思いつくのに、いざそれを使って作品を作ろうとすると手が詰まる。

「まーずいなあ……」 激マズだ。

数日間、そんな感じで悩み続ける日々が続いた。

あまりにも幾ら考えても思いつかないので、仕事のない日は1日中家にこもって、モニターと睨めっこをしてしまう程だった。

「……あ!」

その時、ふと思い出した事があった。

中学時代、地域の同年代の生徒の作文を集めた文集というものがあった。

どんな事をテーマにしても良いし、文字数も制限はないから、何か作文を書いてくれと、校内の生徒が全員で作文を書くハメになり

「そうだ、作文だ!」

俺は、そんな事をいきなり言われても、何を書いたらいいのかなんて、まるで思いつかなかった。

テーマが絞られていないせいで、頭の中で整理がつけられなかったからだ。

散々悩んだ挙句、思いついた作文のテーマ　それが、これだ！！

「僕は、作文が嫌いです」

そう、これだ。

あれを真似て書けばいいのでは？

それからは、まるで地面から水が湧き出るがの如く次々と言葉が浮かび、スラスラと指が動いた。

キーボードを叩く手に力が入る　そう、今俺は小説を書いていくのだ。

そして出来上がった小説　そう、それがこれだ！

今あなたが見ているこれだ！！！！！！

……はい、どうもすいませんでした。

……やっぱり、俺は小説家には、向いていないのかもしれない。

マジですいませんでした、ごめんなさい。

このサイトで読んで下さった方、なによりサイトに投稿されている小説家の方々に、非常に申し分けない事をしたと、深く反省しています。

でも、書いてしまったら、誰かに読んでもらいたくて……。

「ごめんなさい、もう少し真面目にみなさんの作品を読んだ後で、必ずや出直して参ります。。。」

完

（後書き）

どうしても投稿してみたくて仕方がなかったんです

やってみたかったです

色々な方々に失礼を、ごめんなさい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5757m/>

---

小説家になろう

2010年10月10日00時46分発行